

『蒙古字韻』篆字母の実用例
—匣母字について—

吉池孝一

一

『蒙古字韻』は、パスパ文字の篆字を集めて「篆字母」として巻頭に収める。この『蒙古字韻』の篆字母と、実際に印章や碑額で使用されたパスパ文字の篆字を表にまとめたものに照那斯圖(1980)の「八思巴字篆体字母研究」がある。これは1980年までに見ることのできた資料による成果でありこの分野の唯一の研究であるが、『蒙古字韻』にあるけれども対応する実用例を挙げないというものもある。本稿は、そのようなものの内、実用例と見なしうるものを追加しようとするものである。

二

照那斯圖(1980)は『蒙古字韻』篆字母の匣母字(図1参照)と同形の実用例を挙げない。しかしながら、吉池孝一(2004)が紹介する古代文字資料館所蔵の私印(図4参照。中央の第1音節目はパスパ文字漢語で“yo【合】”とあり、下に漢字の“同”が続く。両者で漢語の合同(契約書)となる。初頭のパスパ文字のγが匣母字)に同形の匣母字を見出すことができる(図2参照)。もっとも、この匣母字の印影には、左の縦線部分が欠けている。実物によると、縦線部分の銅材が後に欠落したことを確認することができる。本来は図3のようであったことがわかる。これは『蒙古字韻』の匣母字と同形となる。



図1 『蒙古字韻』の匣母字γ



図2 私印のyo【合】



図3



図4 「金記・合同・利市」印

【参考文献（発行年順）】

照那斯圖(1980)「八思巴字篆体字母研究」『中国語文』1980年第4期,307-309,269頁。

吉池孝一(2004)「元代私印（パスパ字漢語）五顆」『KOTONOHA』19号,21-23頁。

*本稿は平成25年・平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25370488「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。